

学会60周年にあたり

多門 靖容

平成25年(2013年)に学会50周年記念大会を愛知県産業労働センターで行いました。45回大会を本務校(愛知学院大)で行ったので、50周年は回ってこないだろうと思っていました。が、当代表理事であった半沢幹一さんから「愛知は学会発祥の地だから」という尤もらしい理由で愛知開催を強要(?)され、50周年の会場責任者をやりました。

もう10年経つか・・・と、歳を取ってからしばしば覚える類いの感慨をここでも抱きますが、この10年の間の4年間、代表理事を務め、その縁での本エッセイの依頼です。学会運営当時の考え方や苦勞を書いてほしいということなので、思い浮かぶことを少し記します。

中島一裕さん(代表理事)、西尾元伸さん(事務局長)の後を承け、私と野田大志さんが平成29年度(2017年度)から令和2年度(2020年度)まで、学会の運営をしました。目新しくやったことはありませんが、従来と違う方針を採った点もあり、それを書きます。

一つは雑誌編集委員と大会運営委員の兼務です。それまで、それぞれの委員は別、委員会も同一日に時間をずらして二つ行っていました。兼務にすれば委員会は一つ、学会を中心に支えるメンバの意思疎通も滑らかになり、良い面が出るのではと考え、これを行いました。

結果的に、機能的には俊敏になったと思いますが、いくらメンバ数を多くしたとはいえ、委員の仕事は倍になるので、務めていただいた皆さんには、たったものではなかったかもしれません。大会の企画・運営はもちろん、投稿論文の査読は労力も時間も取られる仕事です。にもかかわらず、4年間、大会開催を支え、かつまた投稿論文に丁寧なコメントを記し続けてくれた委員の皆さん、それは、有蘭智美さん、石黒由香里さん、梅林博人さん、大川英明さん、木下りかさん、木村雅則さん、小林一貴さん、田島優さん、西尾元伸さん、野村眞木夫さん、深津謙一郎さん、藤井俊博さん、松村美奈さん、森雄一さん、柳澤浩哉さん、だったのですが、いま、皆さんのお顔を思い浮かべながら、あらためて、よくやってくださったな、という思いがしています。

二つめは学会ホームページについてです。それまでもHPはありましたが、それは野浪正隆さん(当時大阪教育大)の献身の賜物であり、大会や例会の情報の更新など、野浪さんには相当な負担をおかけしていました。それで、お茶の水学術事業会の永長さん、長田さんに、HPの新設、管理の相談をしたところ、学会が継続的に負担できるコストで見積りが出され、試行版の出来も良かったため、お願いすることにしました。コンテンツについて、まだ工夫できる点があるかと思いますが、学会の公式HP設営を、

この期にやれて良かったと思います。

三つめは『表現研究』の内容の充実です。毎年『表現研究』奇数号には「関連分野の研究動向」を載せることが慣習になっていました。ただ執筆者の確保が大変で、抜けがある年度もありました。これをとにかく1年前には全分野の執筆者を確定し、抜けがないよう努めました。107、109、111、113号に、分野によっては会員外の先生をお願いして、研究動向を載せ続けることができたのは良かったと思います。

またこの期は論文投稿数も増えていました。特に若手の方に資するよう、掲載の如何に関わらず、査読コメントをもらって良かったと思ってもらえるよう、編集委員会に尽力していただきました。委員長の野村眞木夫さんを中心に、査読および投稿者への対応を適切に行う態勢を整えることができたのは、措置して当然のこととはいえ、良かった点だと思います。

運営のことは記せば切りがないので、苦勞したことに移りますが、真っ先に浮かぶのは、苦勞した、というより、判断に弱ったことで、それは57回大会(令和2年、2020年)についてです。名古屋学院大学で開催予定でしたが、コロナ状況に照らし、最終的に大会中止の判断をしました。講演会、シンポジウム、研究発表の登壇者の皆さんがそれぞれ準備してくださっているところに、中止の判断を下すのはうれしくありませんでした。

研究発表についてはこの年の秋刊行の学会誌に概要を載せることで発表予定者の皆さんに納得していただき、講演会、シンポジウムについては、準備していただいていた内容を1年待った58回大会で披露していただきました。当時はこの措置しかないと思いましたが、今振り返ると、オンライン開催の可能性を早くに探っていたら、と思われもします。

と、あれこれ書いてきましたが、代表理事の4年間、事務局長として身内も及ばぬ働きをしてくれたのが野田大志さんで、当時のことをこのように書きながら、いろいろあったね、と、野田さんに語りかけたくくなりました。任期中の話はこれで仕舞いにします。

私がこの学会に入ったのは大学院の後期課程の時だったと思います。30数年前です。入会したものの大会にほとんど顔を出さず、例会も発表時以外は不活発、という感じでした。少し歳を取ってから、役割を振られたりして参加するようになりました。

以前は会員に外国語・外国文学の研究者が多く、領域を越えた交流があったと思います。今は日本語・日本文学、特には前者の研究の場としてアクティブです。日本語学の文章・談話部門的な役割も、柱としてあると思いますが、せっかくいろいろな領域の会員がいるので、それぞれの知見を耳学問で学べる場として、もっと活性化すると面白いと思います。

任期中に、領域間交流を目指し、「和歌」のワークショップを行いました。トピックはいろいろあると思います。この種の、表現学会だからできるトライが、これからもっとなされると面白いと思いますし、そういう、良い意味での雑食性が魅力となり、本学会が若い方々を惹きつけることを願っています。